

「悲別歌」の表現

平 館 英 子

一 「悲別歌」の意図

『萬葉集』卷十二には「悲別歌」と題される一群三十一首があり、その冒頭に次の一首を載せている。

うらもなく去にし君故朝な朝なもとなそ恋ふる逢ふとはなけど
(卷十二・三二八〇)

右の歌は、「別れ」を詠みながら、そこに「うらもなく去にし君」とあつて、名残を惜しむ心もなく出ていった君の姿が詠まれている。諸注釈書は「悲別歌」を「別れを悲しむ歌」と訓読しているが、右の歌には「悲別(別れを悲しむ)」の場には相応しくない行為が窺える。何故、この歌を「悲別歌」の冒頭に置いたのであるうか。

卷十二は、人麻呂歌集を出典とする「正述心緒」「寄物陳思」(A群)と出典不明歌からなる「正述心緒」「寄物

陳思」及び「問答歌」(B群)そして「羈旅発思」「悲別歌」及び「問答歌」(C群)の三群からなることは既に指摘されている。⁽¹⁾C群における「羈旅発思」と「悲別歌」は他に見えない部立てであり、「羈旅発思」は旅する者(男性)の歌、「悲別歌」は残る者(女性)の歌を中心とするという区分の見られることも既に指摘がある。⁽²⁾さらに「羈旅発思」が柿本人麻呂歌集出の四首に続いて、「正述心緒」に類する歌十三首、「寄物陳思」に類する歌三十六首を載せるのに対して、「悲別歌」は「正述心緒」に類する歌一首(右に掲げた三二八〇)、「寄物陳思」に類する歌三十首の順に配列されていて、歌数に偏りはあるが、構造上の類似性を有している。

「羈旅発思」の部の「寄物陳思」に類する歌は、歌の素材において、人事に属する衣服(紐)四首・器(玉くし

る・梓弓)二首から天地の現象に属する地象(山・川・海・舟)二十六首・植物(草・藻)二首・天象(雲)二首の順に配列されている。「悲別歌」の部の「寄物陳思」に類する歌は、人事に属する衣服(紐・袖)四首・器材(鏡)一首から天地の現象に属する地象(山・原・川・海・舟)十八首・植物(菅・藻)三首・天象(月)、気象(雲)三首・動物(鳥)一首の順に配列されている。素材の配列順において両者はほぼ対応しており、意識的な配列がなされていることは明らかである。

一方、「正述心緒」に類する部分は、「羈旅発思」において次のように始まる。

月変へて君をば見むと思へかも日も変へずして恋の繁
けむ (卷十二・三一一)

な行きそと帰りも来やとかへり見に行けど帰らず道の
長手を (卷十二・三一二)

一ヶ月後という遠さに恋心を募らせる三一一、引き留めて欲しいと振り返るものの、しかし旅路を進む三一二と旅の始めの頃の男女の思いを詠んでいる。以下に続く作品では旅にある側の気持が詠まれて行くが、その最後に配列されているのは次の歌である。

かく恋ひむものと知りせば我妹子に言問はましを今し
悔しも (卷十二・三一四三)

旅にあつて強い恋心にさいなまれて初めて「今し悔しも」と嘆かれるのは、旅立ちにおいて「我妹子」と充分に言葉を交わさず、充分に名残を惜しまずに来てしまったことへの悔いに他ならない。旅立ちにおけるその行為の理由は詠まれないが、その姿は「悲別歌」冒頭の三一八〇が詠む「うらもなく去にし君」の姿に重なつて見える。「羈旅発思」においては遠く離れた後の後悔としてある心情が、「悲別歌」においては別離の始まりにおける不審としてある。しかも「悲別歌」は、「正述心緒」に類する歌は冒頭歌一首のみで、すぐに「寄物陳思」に類する歌が続くという不均衡な構造を持つ。卷十二の最終的な編纂に大伴家持が関わったであろうことは充分推測できることであり、この配列が残されていることに何らかの意図があつたことを推測することに無理は無いと思われる。もちろん、「羈旅発思」歌群や「問答歌」歌群との関係性も考慮されなければならぬが、本稿では、まず「悲別歌」と題して、三一八〇歌を冒頭に置いた意図を、「悲別歌」群の表現を通して考察したい。

二 悲別

集中において、「悲別」の語自体は題詞や左注に複数見られ、諸注はいずれも「別れを悲しむ」と読むべき状況説

明の一部として捉えている。このことは、中国六朝詩文において別離の悲哀が詩の主要な主題とされ、離別詩として把握されているにも拘わらず、中国詩文において熟字としての「悲別」を見出しにくいことと関係するように思われる。別離の心情を「悲」とする表現は早く、『毛詩』（豳風東山）に見え、兵士の望郷の思いを詠じている。

我徂二東山一 惓惓不レ帰 我来レ自レ東 零雨其濛
我東曰レ帰、我心西悲… (第一章)

我徂二東山一 惓惓不レ歸 我来レ自レ東 零雨其濛
鶴鳴二于埭一 婦歎二于室一… (第三章)

また、『楚辭』（九歌 少司命）に「悲莫レ悲二兮生別離一 樂莫レ樂二兮新相知二」と見え、後に『文選』（卷二十九）「古詩十九首」に「行行重行行 与レ君生別離 相去万余里 各在三天一涯二」の注として引かれてもいる。また、『漢書』（高帝紀下）の「謂二沛父兄一曰、游子悲二故郷二」の顔師古注には「游子行客也。悲謂二顧念一也」とあって、旅にある望郷の思いを「悲」と捉えている。『藝文類聚』の人物十三・十四には別上・別下の項目が見え、多様な「別」を収載するが、熟字としての「悲別」は見当たらない。『藝文類聚』にも見え、『文選』（卷二十三）に所収する魏の阮籍「懷徳詩十七首（十三）」には「願覩レ卒二歆好一 不レ見悲二別離二」とあるが、その解釈は旅立ちによる「別

れ」を指すとは限らない。「悲別」は和習としての用法と考えて良いと思われる。

集中の題詞や左注に見える「悲別」の語の使用は、巻四に見える大宰府の官人大伴百代たちの作品を始めとして、奈良朝以降の作品においてである。

大伴宿祢三依悲レ別歌一首

天地と共に久しく住まはむと思ひてありし家の庭はも

(巻四・五七八)

大伴宿祢三依悲レ別歌一首

照らす日を闇に見なして泣く涙衣濡らしつ干す人なし
に (巻四・六九〇)

右の二首は、いずれも相聞の部立てに属する。大伴三依は神龜末年から天平初期にかけて大宰府におり、大伴旅人にも仕えたと推測される。五七八は旅人上京の折の「別れ」の作（代匠記）とも、「天地と共に久しく」が「天地と共に終へむと」（巻二・一七六 舍人等の挽歌）「天地と共にもがも」（巻十五・三六九一 葛井連子老作挽歌）のように挽歌に用いられる表現であることから、旅人薨去後「その佐保邸を悲しんで作った」（私注）とも解されている。しかし、相聞に属していることは挽歌としての把握ではなく、別れの抒情を主とする把握によることを意味している。そこに嘆かれるのは上司と下僚として期待していた未来の

時間の消失である。一方、六九〇は涙で濡れた袖を干す人への思慕がある。その内容は「此別ハ旅ト聞ユレバ、落句ハ、ホシテ得サスベキ妹モナキトナリ」（代匠記・精）とされるように、旅にある悲嘆の情を共有できない相手の存在が意識されている。身体的別離は「干す」行為を通して実は精神的別離でもあることを感得させ、理解の届かない現在への嘆きを理解させる。二首は同一の題詞で共に「悲別」の語を用いているが、そこに官人の別れと男女の別れという内実の相違を窺える。

官人の別れを「悲別」とする作に、家持が少納言に任せられて越中国から帰京する際の作が見える。

以三七七月十七日一遷二任少納言一仍作二悲レ別之歌一
贈二貽朝集掾久米朝臣広繩之館二首

既満二六載之期一、忽値二遷替之運一。於是別レ旧之
懐、心中鬱結、拭レ涕之袖、何以能早。因作二悲歌

二首一、式遺二莫忘之志一。其詞曰、

あらたまの年の緒長く相見てしその心引き忘れえぬや
も

石瀬野に秋萩しのぎ馬並めて初鳥狩だにせずや別れむ

（巻十九・四二四八）

家持は帰京に際して広繩の館を訪れたが、留守だったために別れの歌二首を書き残している。四二四八では共に過ご

した過去の時間をいとおしみ、四二四九では逆に提示した未来の時間を共に過ごせないままに別れ行くことを惜しんでいる。「別れ」の心情は惜別の情として表現され、「拭レ涕之袖、何以能早」に干すべき人を思い浮かべるわけでは無い。

なお、官人達の別れでは、別れがたい情と道中の無事への祈りも詠まれている。天平二年庚午夏六月、大宰府で瘡脚の病を患った大伴旅人を見舞った稻公等を見送った大監大伴宿祢百代と少典山口忌守若麻呂の二首がある。

草枕旅行く君をうるはしみたくひてそ来し志賀の浜辺
を

（巻四・五六六 百代）
周防なる磐国山を越えむ日は手向よくせよ荒しその道

左注には「共到处夷守駅家一、聊飲悲レ別。乃作二此歌二」とする。夷守駅家における別離の宴での作で官人同士の別れの情を見送る側から詠むが、逆に見送られる側の歌もある。

堀江越え遠き里まで送り来る君が心は忘れぬましじ

（巻二十・四四八二）

右一首、播磨介藤原朝臣執弓赴レ任悲レ別也
主人大原今城伝読云尔。

別離の心情は見送りへの感謝に別れがたい情を託して、

官人間における別離の歌の形式を考えさせる。

一方、後者、男女の別れを「悲別」とするのは、卷十五の遣新羅使人等の歌群の冒頭十一首の題詞に見える。

遣新羅使人等、悲別贈答、及海路働情陳思、

并当所誦之古歌

武庫の浦の入江の渚鳥羽ぐくもる君を離れて恋に死ぬべし
(卷十五・三五七八)

大舟に妹乗るものにあらませば羽ぐくみ持ちちて行かましものを
(卷十五・三五七九)

君が行く海辺の宿に霧立たば我が立ち嘆く息と知りませ
(卷十五・三五八〇)

秋さらば相見むものをなにかも霧に立つべく嘆きしまさむ
(卷十五・三五八一)

大舟を荒海に出だします君障むことなくはや帰りませ
(卷十五・三五八二)

ま幸くて妹が齋はば沖つ波千重に立つとも障りあらめやも
(卷十五・三五八三)

別れなばうら悲しけむ我が衣下にを着ませ直に逢ふまで
(卷十五・三五八四)

我妹子が下にも着よと送りたる衣の紐を我解かめやも
(卷十五・三五八五)

我が故に思ひな瘦せそ秋風の吹かむその月逢はむもの

故 (卷十五・三五八六)

椀衾新羅へいます君が目を今日か明日かと齋ひて待たむ
(卷十五・三五八七)

はろはろに思ほゆるかも然れども異しき心を我が思はなく
(卷十五・三五八八)

右十一首、贈答

右に詠まれる男女の「別れ」には、体温を感じさせる「羽ぐくもる君」との離別に身体的別離の感得(三五七八・三五七九)や「霧に立つべく」にその嘆きの視覚的把握(三五八〇・三五八一)があり、続いて早い帰京が望まれ(三五八二)、その実現のための「妹が齋はば」(三五八三)「齋ひて待たむ」(三五八七)という呪的な儀礼の必然性に繋がっている。呪的な儀礼を詠むことは無事を祈る心情の具象化として両者の有縁的関係を示している。「うら悲し」は家持の好んだ語で「春の野に霞たなびきうら悲し」(卷十九・四二九〇)と同じく、「しかと定めがたい愁いを含んだ心情」(全注)を示すと考えられる。そこには帰京までの間の別離の実態に想像が及ばない不安が漂い、それに対して両者の身体的な繋がりを保証するのが妹の衣を着(三五八四)、その紐を解かない(三五八五)という具体的な行為であり、共に「異しき心」を持たないという誓いが繰り返される。右の十一首には、身体的な別離の把握に始

まる別離の情が精神的な連帯へと昂揚して行く過程が読み取れるが、それは男女相互の関係から生じているものである。

集中で、「悲別」の語を題詞に有して、女性が詠む歌は、他に次の一首に限られる。

悲別

朝戸出の君が姿をよく見ずて長き春日を恋ひや暮らさ

む (卷十・一九二五)

「悲別」とのみ題される右は、「春相聞」に配列される。寄物陳思の歌に「恋そ暮らしし雨の降る日を」(卷十・二六八二)とあることから、訪れていた男が早朝帰って行く姿を詠んだとも解されるが、「朝戸出」の用例からは、朝の旅立ちの歌と考えられる。

朝戸出の 君が足結を 濡らす露原 早く起き 出で

つつ我も 裳裾濡らさな (卷十一・二三三三七)

大君の 任けのまにまに …… 朝戸出の かなしき我が子 あらたまの 年の緒長く 相見ずは 恋しくあるべし… (卷二十一・四四〇八)

二三三七は「足結」に旅支度を窺わせ、四四〇八は防人に出立する姿を詠んでいて、「朝戸出」は旅立ちを意味すると考えられる。一九二五はその旅への出立に際して、「君の姿をよく見ずて」と相手を十二分に見なかつたことへの

後悔を詠む。つまり別離において十分な見送りをせず、相手の姿を十分に目に焼き付けなかつたことへの悔いである。別離における「見る」ことの意味を考えさせる。それは共に別離を嘆く卷十五の冒頭十一首には見えなかつた表現であり、卷十二の「悲別歌」の冒頭歌と同様の方向性を窺わせる。官人たちの別離にも見えなかつた、残される側の「見る」ことの意味である。

他に遣唐使に行く阿倍老人が母に送った歌では、嘆きの対象として別離の遠さが把握されて、遣唐使という特異な事情を窺わせる。

ぬ 天雲のそきへの極み我が思へる君に別れむ日近くなり (卷十九・四二四七)

また、遣唐使に行く人を見送る歌では、題詞に「悲別」の語は無いが、歌中に「別悲美」が見える。

み (別悲美) 天雲の行き帰りなむもの故に思ひそ我がする別れ悲し (卷十九・四二四二)

「別悲美」の表記には、「別れ」自体を「悲し」とする和語としての把握が窺える。

さらに、家持作の「追三痛防人悲別之心」作歌(卷二十・四三三三〜三三)及び「陳三防人悲別之情」歌(卷二十・四四〇八〜一二)には「大君の 命のまにま …… 事し終はらば 障まはず 帰り来ませと 齋瓮を 床辺に掘ゑ

て：長き日を 待ちかも恋ひむ 愛しき妻らは」（卷二十・四三三）「家人の斎へにかあらむ平けく舟出はしぬと親に申さね」（卷二十・四四〇九）と無事を祈る呪的儀礼を行いつつ待つ姿とそれを期待しつつ船出する姿が詠まれて、卷十五の冒頭歌群に類似する表現が見られる。一方で、四二四二と同じく、歌に「悲し」と直接詠みこまれている点が注目される。

鶉が鳴く東男の妻別れ悲しくありけむ年の緒長み

（卷二十・四三三三）

ちちの實の 父の命は 朝戸出の かなしき我が子
あらたまの 年の緒長く 相見ずは 恋しくあるべし
今日だにも 言問ひせむと 惜しみつつ 悲しびませ

ば
（卷二十・四四〇八）

「悲し」は、「年の緒長み」を理由とした「別れ」の時点で妻の心情であり、父の心情であつて、四二四二の「別れ悲しみ」の心情に共通する。第三者として家持も別離の意味を別れることとして捉えていたことが窺える。卷十五の冒頭歌群には「別れなばうら悲しけむ」（卷十五・三五八四）と見えたが、「悲別歌」には「悲し」を直接詠む作はなく、「悲別歌」における表現を検討する必要があると考えられる。

三 「別れ」の表現性

『古事記』『日本書紀』において歌謡を伴って別離を記述する場面で注目されるのは、奈良朝の律令体制下の羈旅とは異なり、再会を望むことのない別離である点である。神代記において、八千矛神が嫡妻須勢理比売の嫉妬に困惑して、出雲から倭国へと出立する際、八千矛神は馬の鞍に手をかけ鐘に足かけた状態で、「ぬばたまの 黒き御衣を：」に始まる長歌謡（記四）を歌う。旅立ちの衣装を一念に選び終えた後、須勢理比売に対して「愛子やの 妹の命」と呼びかけ、独り淋しく残る覚悟を問いかける。ここには旅への出立における「別れ」の場に、儀礼性を感じさせる「別れ」が演出されている。二神は結果として別れなすが、旅立ちが唐突に行われるものではなく、「別れ」の場のあることを考えさせる。その背景に旅が生死の別離に通じる大事であったことは当然推測できるが、死別との差をどのように把握しているのであろうか。

生別でありながら、再会がかなわないことを語るのは火遠理命と豊玉毘売命の別離譚である。豊玉毘売は本来の姿を見られたことで、地上と海の境を塞ぎ、火遠理命と住む世界を異にする。豊玉毘売命は火遠理命を恋うる歌で「白玉の君がよそひ」（記七）と、海神の宮から地上に戻る際

の火遠理命の装束を愛でている。そこに「別れ」の儀礼を認められることは別に述べた。それは異界に住み、再会の出来ない別離である。

生別離が異界の者との別離の如く語られるのは仁徳記における天皇と吉備黒日売との別離譚である。吉備黒日売は仁徳天皇に喚し上げられたが、大后石日売の嫉妬を恐れて、吉備に逃げ帰る、その「別れ」の場面において、天皇は黒日売が舟を連ねて帰郷する様を望み瞻て歌い、見送っている。黒日売を追って吉備を訪れた仁徳天皇の帰京に際して、黒日売が歌う「倭辺に 西風吹き上げて 雲離れ 退き居りとも 我忘れめや」(記五五)は、水江の浦の嶼子譚(『丹後国風土記』逸文)で、神の女が嶼子との「別れ」を歌う歌と類似する。本来海浜の遊女の歌が伝播したといった成立論は措いて、類歌としての存在は仁徳天皇と黒日売、浦の嶼子と神の女との関係が実は類似し、その別離が異界の者との別離の如く把握されていることを考えさせる。また顕宗天皇と置目との関係は男女の恋愛譚ではないが、「別れ」を詠む点では共通する。顕宗天皇は年老いた置目が故郷近江へ退出する時に見送って「別れ」を惜しむ。

置目もや 淡海の置目 明日よりは み山隠りて 見えずかもあらむ (記一一二)

「別れ」に惜しまれるのは、日常にその姿が見えなくなる

ことである。「見送る」行為が明記され、別離とは相手が見えなくなることと把握されている。相手が「見えず」とすることは存在の否定ではない。むしろ存在への確信であろう。それ故に逢えないことが嘆かれるのである。そこに「別れ」の本質があることが理解される。それは「別れ」に「悲傷」といった挽歌的な印象に繋がる「悲」の字を、いとおしさを含む情感を示す日本語の「かなし」の訓字として当てていること、理由でもある。それ故に、近江は実際の距離とは異なる、再会を望めない遠さとして把握される。それは異界に在る者との別離に通じる遠さでもあるのだらう。

「別れ」が「見えず」の嘆きに通じることは、『萬葉集』の「額田王下近江国時作歌」にも見られる。「うまさけ三輪の山 … つばらにも 見つつ行かむを しばしばも見放けむ山を 心なく 雲の 隠さふべしや」(巻一・一七)は、雲が隠して見えない三輪山に対する嘆きは「別れ」における見送りの情という通じ合いがないことを象徴する。近江への遷都は大和を棄てることであり、再び大和の地を都としては見ないことを意味し、「別れ」が再会を望めないと云う意味に通じるものである。雲が隠すことについて、内田賢徳氏は「雲に有情のように呼びかける額田王歌の情感は、まなざしがそこに隠された三輪山を希求す

ることと、その蔽われてあることへの愛惜、そして蔽うものへの興味に構成されている」とされる。「別れ」において、別れる対象を見送ることは、その行為によって別れる対象の存在を確認し、その対象への自らの思いを感得することでもあり、それが見送りの儀礼性には、本来息づいていたと考えられる。生別は死別とは異なり、相手の存在を確信しながら、しかし、逢えないことである。それは距離的な遠さを含みつつ、距離だけでは計れない、或る隔絶として把握されている。旅立ちにおける装束の整い、見送りの儀礼における「見えず」の把握、そして生別が再会のかなわない異界にあることへの連想、そうした要素を読み取ることができると思われる。

なおこうした要素は、『萬葉集』の奈良朝以前の作品において、男女の「別れ」を詠む「石見相聞歌」にも継承されていると考えられることは別に述べた。

四 悲別歌

うらもなく去にし君故朝な朝なもとなぞ恋ふる逢ふとはなけど

(卷十二・三二八〇)

卷十二の悲別歌群の冒頭に置かれた右の歌が、「正述心緒」に類する歌と見られ、その内容に「悲別(別れを悲しむ)」の場には相応しくない行為が窺えることは既に指摘

した。その理由について「旅立つ夫が心慌ただしかつたためか」(窪田評釈)とも、「夫は別れの悲しさを蔽うためにもわざと『うらもなく』きふりをして出て行ったのか」(釈注)とも解される。その素っ気ない行為が「妻には恨めしかったのである」とし、それでも夫を「恋ふる」心情を詠んでいることについて、「一首の歌の中に、複雑な、屈折した気分の盛られている点で、極めて特殊な歌である」(釈注)とされる。「うらもなく去にし」は、妻を拒絶する態度に見えるものであり、残された妻は夫のその対応をいぶかりつつ、「逢ふとはなけど」と、もはやその真意を知りようの無い状況を嘆息している。三二八〇が示すのはむしろ「別れを惜しむことができない別れ」への戸惑いであり、「悲しい別れ」として印象づけられるものである。右の冒頭歌一首は「別れ」を惜しむことができない状況のまま「逢ふとはなけど」という別離の現実のみが残された状況を詠む。そこに読み取れるのは「別れ」を悲しめない「悲しい別れ」であろう。

右の歌は「悲別歌」群の冒頭に置かれ、かつ「正述心緒」に類する歌として一首のみである。続いて、「寄物陳思」に類する歌が配列され、その配列の順が人事から天象へと及ぶことは既に述べたとおりである。以下、その内容をA「別れ」の時、B「山越え」「見えず」の表現、

C 不來見、D 放り行く人・後れ居る人、E 悲しい別れ、と区分して検証してみたい。

A 「別れ」の時 (三二八二～三二八五)

白たへの君が下紐我さへに今日結びてな逢はむ日のため (卷十二・三二八二)

白たへの袖の別れは惜しけども思ひ乱れて許しつるかも (卷十二・三二八二)

都辺に君は去にしを誰が解けか我が紐の緒の結ふ手たゆきも (卷十二・三二八三)

草枕旅行く君を人目多み袖振らずしてあまた悔しも (卷十二・三二八四)

まそ鏡手に取り持ちて見れど飽かぬ君に後れて生けりともなし (卷十二・三二八五)

「下紐」を「結ふ」行為 (三二八二) から「誰が解けか」(三二八三) という不安へ、「袖の別れ」(三二八二) から「袖振る」(三二八四) 行為へと紐と袖を交互に繰り返しつつ展開し、具体的な行為を通して、身体的な別離に揺れる心情が詠まれる。それらはいずれも「思ひ乱れて許しつるかも」(三二八二)「あまた悔しも」(三二八四)「生けりともなし」(三二八五)といった自身に向く内的感情であつて、卷十五遣新羅使人等の歌群の冒頭十一首に見られた、「霧に立つ」(三五八〇・三五八一)という嘆きの視覚化や

「障むことなく早帰りませ」(三五八二) という旅行く者への願ひ、さらには「齋ふ」(三五八三・三五八七) という旅の無事を祈る呪的行為といった、旅行く者との有縁的關係が見られない。冒頭第一首三一八〇の戸惑いとの対応に窺わせる点である。前章で、別離が「見る」ことの否定にあるという奈良朝以前の理解に触れたが、三一八五にその踏襲が窺える。「まそ鏡」に始まる二句は「見れど飽かぬ君」を導き、日常的な所作として鏡を見ることと君を見ることとが重なるが、君の出立後、「君に後れて」の実態は「君が見えず」あることに他ならない。右の五首における「別れ」は身体的な別離への時間であり、「見えず」である関係性の始まりであることを考えさせる。

B 山越え「見えず」の表現 (三二八六～三二九四)

曇り夜のたどきも知らぬ山越えています君をばいつと
か待たむ (卷十二・三二八六)

たたなづく青垣山の隔りなばしばしば君を言問はじかも (卷十二・三二八七)

朝霞たなびく山を越えて去なば我は恋ひむな逢はむ日
までに (卷十二・三二八八)

あしひきの山は百重に隠すとも妹は忘れじ直に逢ふま
でに (一に云ふ「隠せども君を思はく止む時もなし」)

(卷十二・三二八九)

雲居なる海山越えてい行きなば我は恋ひむな後は相寢とも
(卷十二・三一九〇)

よしゑやし恋ひじとすれど木綿間山越えにし君が思ほ
ゆらくに
(卷十二・三一九一)

草陰の荒蘭の崎の笠島を見つつか君が山路越ゆらむ
二に云ふ「み坂越ゆらむ」
(卷十二・三一九二)

玉かつま島熊山の夕暮にひとりか君が山路越ゆらむ
二に云ふ「夕霧に長恋しつ寝ねかてぬかも」
(卷十二・三一九三)

息の緒に我が思ふ君は鶉が鳴く東の坂を今日か越ゆら
む
(卷十二・三一九四)

最初の四首には山を越えて行く行為を提示し、「隔りなば」
(三二八七)「越えて去なば」(三二八八)「百重に隠すと
も」(三二八九)と去りゆく姿を仮定法で繰り返す。三二
八九は本歌が去りゆく側の歌で一云歌が残された側の歌で
あるが、逆接の仮定法が「忘れじ」「止む時もなし」とい
う強い意志の表明を導く。この表現は、逆に「百重に隠
す」状況は忘れ、思い止むことが一般であり、かつ仮定法
を重ねるところに隠されて見えなくなることへの確信のあ
ることを考えさせる。ここには近江の置目に対して「み山
隠りて 見えずかもあらむ」と顕宗天皇が詠んだ世界が広
がっている。

三一九〇は「雲居なる海山越えて」と、海山は見えない
可能性を含む水平線上のはるか彼方⁽⁹⁾を示している。「い行
きなば」(三一九〇)はもはや捉えがたい空間故への仮定
法であろうし、「我は恋ひむな後は相寢とも」における現
在の恋情は、かなうという保証のない遠い未来を逆接の仮
定条件「とも」で受けることから生じている。海山を越え
ることには、戻れない異界に行くことへの遠い記憶への連
想が働こう。それ故の恋情でもあろう。続く三首は「木綿
間山」(三一九二)「荒蘭の崎」(三一九三)「島熊山」(三
一九四)と具体的な地名が挙がっているが、いずれも所在
未詳であることに注意したい。「木綿間山」は東歌に類歌
が「恋ひつつも居らむとすれど遊布麻山隠れし君を思ひか
ねつも」(卷十四・三四七五)と見える。影響関係は不明
だが、東国に関連する山としての知識があったかもしれず、
「越えにし」(三一九一)と「隠れし」(三四七五)とする
山の理解には共通性が把握できる。前半部が「たたなづく
青垣山」(三二八七)「朝霞たなびく山」(三二八八)「あし
引きの山」(三二八九)「雲居なる海山」(三一九〇)のよ
うに特定の地が詠まれないのに対して、具体的な地名「木
綿間山」「荒蘭の崎」「島熊山」が所在未詳であることは、
逆に名のみ知っている地であった可能性を窺わせ、現実感
のなさが把握できる。それは繰り返される「越ゆらむ」の

ラムの用法「表現者自ら確かめることができなないので、一抹の疑念を残して、推量的に言う」（時代別国語大辞典上代編）と対応し、「木綿間山」を「越えにし」先は、もはや手の届かない地という理解に繋がる。なお、「鳥熊山」に対する、枕詞「玉かつま」の懸かり方は未詳だが、「鳥熊山」のシマに縮まる意を考慮すると、外部から籠の中に入ることの出来ない意が想起され、その山越えは続く「夕暮れ」と響き合つて大層暗く寂しい様子として浮き上がつて来る。そこに見えるのは旅行く人であり、妻から放り行く人である。さらに三一九四の「鳥が鳴く東の坂」（三一九四）は東国のいづれの坂か、特定していかないか、境を想起させる東国の坂を越えることは、ある境界を越えることを示して、もはや戻れないことを示唆している。

C 不來見（三一九五）

磐城山直越え來ませ磯崎の許奴美の浜に我立ち待たむ

（卷十一・三一九五）

右は、地名「許奴美」に「來ぬ身（來ない身）」を懸けている。下河辺長流の『統歌林良材集 上』「てこのよひ坂の事」には『駿河国風土記』を引き、岩木山を越えて庵原郡不來見の浜の妻（女神）の許に通う神が、荒ぶる神に妨げられて岩木山を通れず、通えなくなつた。待ちかねた女神が男神の名を呼んだところからそこを「てこ」（女の意）

の呼坂」としたとし、三一九五の類歌を載せて、「こぬみの浜は男神の來ぬよりいへると云々」とする。『統歌林良材集 上』はこの説話を東歌「東道の手児の呼坂越えて去なば我は恋ひむな後は相寝とも」（卷十四・三四七七）の類歌の解説として載せている。三一九五を「悲別歌」群のこの位置に記載することは、夫に対する諸念の情を示す。山を越えた先にいる夫はもはや戻らないことを理解しつつも、待つ身であることのやるせなさが表明されている。「てこのよひ坂」説話に通じる歌の存在は、「寄物陳思」に類する歌群に、ある区切りとしての位置づけのあることを考えさせる。

D 放り行く人・後れ居る人（三一九六～三二〇六）

春日野の浅茅が原に後れ居て時そともなし我が恋ふら
くは
（卷十一・三一九六）

住吉の岸に向かへる淡路島あはれと君を言はぬ日はな
し
（卷十一・三一九七）

明日よりはいなむの川の出でて去なば留まれる我は恋
ひつつやあらむ
（卷十一・三一九八）

海の底沖は恐し磯回より漕ぎたまいませ月は経ぬとも
（卷十一・三一九九）

銅飯の浦に寄する白波しくしくに妹が姿は思ほゆるか
も
（卷十一・三二〇〇）

時つ風吹飯の浜に出で居つつ贖ふ命は妹がためこそ

(卷十二・三二〇一)

熟田津に舟乗りせむと聞きしなへなにかも君が見え来
ざるらむ

(卷十二・三二〇二)

みさご居る渚に居る舟の漕ぎ出なばうら恋しけむ後は
相寝とも

(卷十二・三二〇三)

玉かづら幸くいまさね山菅の思ひ乱れて恋ひつつ待た
む

(卷十二・三二〇四)

後れ居て恋ひつつあらずは田子の浦の海人ならましを
玉藻刈る刈る

(卷十二・三二〇五)

筑紫道の荒磯の玉藻刈るとかも君が久しく待てど来ま
さぬ

(卷十二・三二〇六)

三一九六以下の歌々の地名は、いずれも所在が確認でき
るものであり、『萬葉集』中に他に見られる著名な地ばか
りである。地名の順は淡路島・難波という都に近い地域か
ら四国の熟田津・そして筑紫道に至っている。その間の田
子の浦は都からは中国に当たる。筑紫道に向かつて放り行
く人を詠みつつ、後れ居る人の心情が反対方向の田子の浦
での「海人ならましを」という反実仮想として示されると
ころには、両者の心情的な遠さを距離的にも把握させる。

三一九七・三一九八・三二〇〇では地名「住吉の岸・淡路
島」「いなむの川」「飼飯の浦」が序詞に使われ、三一九六

の「春日野の浅茅が原」は卷十二・三〇五〇に類似表現が
見え、三二〇二は額田王の有名な「熟田津に舟乗りせむ
と」(卷一・七)を想起させる等、文飾、類型的な発想が
窺える。他に「時そともなし我が恋ふらくは」(三二九六)
は卷十二・三〇八八・三一六八に、「贖ふ命は妹がためこ
そ」(三二〇一)は卷十一・二四〇三に類句が見え、「みさ
ご居る渚に居る舟の」(三二〇三)は卷十一・二八三二に、
「海人ならましを玉藻刈る刈る」(三二〇五)は卷十一・二
七四三或本歌に同句があるなど、表現上の類型性を数える
ことができる。勿論、卷十二が作者未詳歌群であることを
考慮しなければならぬが、D歌群におけるこうした傾
向は山を越えた地への想像といった状況を窺わせる。後れ
居る人の心情も、「磯回より漕ぎたみいませ」(三二九九)
と早い帰京よりも安全を願う余裕が見え、「君が見え来ざ
るらむ」(三二〇二)の不審をふくみ、「久しく待てど来ま
さぬ」(三二〇六)という現実が確認される。D歌群には
旅行く人の歌(三二〇〇・三二〇一)や土地の女(三二〇
二、窪田評釈)・土地の遊行女婦(三二〇三)^②の歌かと
もされる歌が混じる。こうした揺れは放り行く人への後れ
居る人の諦念を窺わせる。

E 悲しい別れ

あらたまの年の緒長く照る月の飽かざる君や明日別れ

なむ (卷十二・三三〇七)

久にあらむ君を思ふにひさかたの清き月夜も闇のみに

見ゆ (卷十二・三三〇八)

春日なる三笠の山に居る雲を出で見るごとに君をしそ

思ふ (卷十二・三三〇九)

あしひきの片山雉立ち行かむ君に後れて現しけめやも

(卷十二・三三二〇)

最後の四首は「明日わかれなむ」(三三〇七)と別れの前日が提示され、月・雲・鳥と空に関連する素材が見えて、三三〇六までの展開とその有り様を異にする。月と対照させて三三〇七は君への讚美を、三三〇八は私の心情の闇のような暗さを表現する。三三〇九で、雲に託して繰り返される思慕(三三〇九)には「額田王下^二近江国^一時作歌」が想起され、雲は隠す雲であり、隠れて見えない君への思慕が詠まれる。と共に、雲の遠さに君との測りがたい距離の遠さが重なる。そして三三二〇の旅立つ君を雉に託す表現には雌や子を残して羽音激しく勢いよく飛び立ってしまふ雉の生態が重なる。その印象と「後れて現しけめやも」との対比は『万葉集全注』の「雉に寄せて別れの悲しみを強烈に歌った。……『悲別歌』の結びにふさわしい」という評価を納得させる。ただし、「立ち行かむ」の推量は旅立ちの前であることを示す。四首を纏まりとすれば、時間

的には卷十二の冒頭歌一首以前の作と位置付けられる。

卷十二の冒頭歌は「別れ」を悲しめない「悲しい別れ」を詠んでいた。「別れ」における古代的な発想や理解、即ち「見えず」への視点や山を越えた地があたかも異界であるかの如く戻ることのない地という視点をもって読む時、「悲別歌」群には従来とは異なる、「残る者(後れ居る人)」の別離の時間の推移と心情の展開を読むことが可能であり、末尾四首を「別れ」の前日に置く時、「後れて」「現しけめやも」の心情が「悲別歌」冒頭の「悲しい別れ」を経て、放り行く人への諦念へと展開することが理解され、筋立てをもつ歌群として読むことが可能な表現がなされていた。卷十二「悲別歌」群を読む試論である。

注

(1) 「歌群配列と歌群研究」『萬葉集の歌群と配列 上』塙書房 平成二年 初出 昭和五五年一一月

(2) 露木悟義「羈旅発思と悲別歌」『万葉集を学ぶ』第六集 有斐閣 昭和五三年

(3) 李善注に「言四時代移、日月遞運。年寿將^レ盡而人莫^二已知^一。恐被^二讒邪^一横遭^二揮斥^一。故願親^レ卒^二歎好^一不^レ見悲^二別離^一」とあり、「時代の变革、即ち魏の天下が衰えて、よくない人のために排斥の憂き目に遇おうとするのを悲しむ意が、こめられていると見られよう」

- (新釈漢文大系『文選(詩篇)上』)といった解釈に繋がる。
- (4) 「羈旅発思」にも「旅の悲しく」(卷十二・三二四一)とはあるが、別離自体を「悲し」とは把握しない。
- (5) 拙稿「白玉の君がよそひ」『万葉集研究』第三十四集 塙書房 平成二五年
- (6) 拙稿「吉備の黒日売訪問譚」『説話論集』第十八集 清文堂 平成二二年
- (7) 『萬葉の知』塙書房 平成四年
- (8) 拙稿「石見相聞歌―放り行く人・その心」『万葉集研究』第三十一集 塙書房 平成二二年
- (9) 「雲居」の理解については茂野智大「石中死人歌の構成―われ」の視点と方法―『萬葉』(三六号 平成二五年一月)を参照。
- (10) 「玉かつま阿倍島山」(三一五二)の転訛説(私注)がある。阿倍島山は所在未詳。「玉かつま」と「島熊山」との関係は、籠を締めて組む意(代匠記)とも籠や箱の身と蓋が合い隙間がない意(新編古典全集)ともする。
- (11) 代匠記初稿本は「うすひ(碓日)の坂」、精撰本は「足柄御坂」とする。
- (12) 船着き場にいる女子(全注釈)、港の女(私注)、港の遊行女婦(古典集成・釈注)といった理解がある。
- (13) 雉は繁殖期を除いて別々に暮らすことが知られている。東光治『続萬葉動物考』(人文書院 昭和一九年)参照。